



水生む山を仰ぎみて

元旦夕方、突如起きた能登半島地震。日本から遠い西の大陸で広がっている戦争の勢い。化石燃料でまかなわれている日々が当たり前の平和な日本ですが、今まで通りということがもう叶わなくなっていくかもしれません。地球の異変が1年毎に進んできているからです。今冬、日光連山は積雪が少なく、栃木県の水源地である中禅寺湖も渚がずいぶん広がり、華厳の滝は全く水が落ちていません。源流に近い地に住む者として、これから暮らしの中の水とどのように付き合っていけば良いのかと思うことがあります。

全国各地に造られたダムや、今また建設中のダムのことが気になります。地球の異変によって、水ではなく土砂を溜めるものと化していくのではないだろうか、異常な降水量を溜めきれず本体そのものが決壊してしまうことはないのだろうか、と。そのような思いを抱いた時、いくつかの地で展開されてきたダム問題を伝える映画と出会いました。宇都宮で開かれた映画会の一部を紹介します。

「森は海を 海は森を恋いながら 悠久よりの愛紡ぎゆく」映画のタイトル「悠久よりの愛」は、ここから誕生したと思います。これは宮城県在住の歌人・熊谷龍子氏の作品です。この歌を基に、同じく宮城県の牡蠣養殖家・畠山重篤氏が理事長となって立ち上げたNPO法人「森は海の恋人」は、宮城県が発表した新月ダム計画について中止を求め、漁民が山を守る活動に発展していく礎となりました。従来、森と海は遮断されたものでしたが、氏によってこれが一つに繋がっていることを多くの人に知らしめるものとなりました。この半世紀に全国各地で森が壊され、巨大ダムが建設される時代となっていた時、畠山氏のこの呼びかけは、日本人の

心の底にある自然とともにある暮らしを再び振り返るきっかけになっていったと思います。

1月21日(日)宇都宮大学峰が丘講堂において、宇都宮大学森林科学科・山本美穂教授の「しもつけ流域の会」の主催により映画会が開催されました。「悠久よりの愛」一脱ダム新時代ー(2021年制作)は、「第39回日本映画復興奨励賞受賞 長編ドキュメンタリー映画」です。プロデューサーは30年以上前から全国のダム建設の問題点を指摘・発表されてきた矢間秀次郎(やざまひでじろう)氏。本県の思川開発事業における南摩ダム建設問題にも深い関心と憂慮を持ち、「思川開発問題を考える流域の会」の観察会にも足を運んでくださった方です。約2時間の上映は、

【A】ダム建設中止・撤去の地域

【B】係争中・建設中の地域

【C】ダム完成の地域

それぞれに関わった人々の証言をつぶさに伝えた構成になっており、中でも【A】の宮城県畠山重篤氏の活動については、ほぼ上映時間の半分を割いて紹介されています。以下、【A】【B】【C】において、それぞれ映画の中で報告された要旨を紹介します。

【A-①】 宮城県 新月ダム建設中止

NPO「森は海の恋人」畠山重篤氏らの活動・1973年 気仙沼の舞根(もうね)湾上流に新月ダム計画が発表されたのを機に、1989年漁業者の立場から源流の山を守ろうと第1回の植樹会を実施。2019年の31回目には皇太子殿下(当時)のお印である梓の木を植樹。

・2000年 県が建設計画中止を決定。

・2011年 東日本大震災にて自宅被災。牡蠣の養殖筏も壊滅。海は死んだかと思われたが、数ヵ月後に、孫が海で魚を見つけてきた。

目次:

水生む山を仰ぎみて 1

ボランティアフェスタ参加 2

ウクライナ戦争考 3

川むしたんけん隊 4
足尾・神子内川

活動報告 4
2022年度会計報告

定例会のお知らせ

毎月・第4金曜日

午後1時～2時

参加希望の方は会場・日時をお問い合わせください。

◆ ご協力お願い

毎月11日はイオンの「イエローシートキャンペーン」日です。半年に一度、レシート合計金額の1%が登録団体にカードで寄贈されます。当会も登録しています。毎月11日のお買い物時には、「今市の水を守る市民の会」のボックスにレシートを入れてくださるようご協力お願いします。(印刷用紙、プリンタインクなど)当会の活動に必要な品物を購入させていただきます。

上流に人家がなく、河岸も自然のままに保たれている神子内川
(調査レポートは4ページ)



・ NPOの副理事長である田中克(まさる)京都大学名誉教授の調査により震災後、大量のプランクトンの発生が認められた。20年にわたる植樹活動により湾を整備していたから、プランクトンが生き延びており、震災後も牡蠣が育つことの証明となった。

・ 海は失ったものを必ず取り戻しに来る。津波であるかもしれない。しかし生きものを育むプランクトンを大量に発生させてくれるものでもある。牡蠣養殖の未来に大きな光が差してきた。

・ 防潮堤を震災復興のシンボルと捉えることはできない。
・ ダムは人類の行く手を阻害するものだ。

【A-②】京都府 鴨川ダム建設中止

志明院住職 田中真澄氏らの活動

・ 1980年 鴨川ダムの計画発表。鴨川の上流部に位置する山岳寺院・弘法大師ゆかりの寺 ― 生態系が整っていた川。「上流の豊かな森を守ることが下流を守ること」になるとして、「北山と鴨川の自然をはぐくむ会」を立ち上げ、ダム反対を表明。

・ 1989年の川の調査では、オオサンショウウオが7～8匹見つかった。

・ 1990年 梅原 猛氏らが「文化の歴史を見続けてきた川」として府に建設中止の請願書提出。

・ 同年7月20日 府が建設中止を決定。

【A-③】熊本県球磨川水系 荒瀬ダム撤去完了 荒瀬ダムの撤去を求める会

・ 1949年 球磨川の18^号上流に県営ダムとして竣工も、周辺地での振動・地鳴り・水質汚濁を指摘。

・ 2002年 当時の潮谷義子知事が水利権更新7年後の撤去を表明。

・ 2010年 蒲島知事が撤去表明。2018年撤去完了。

【B-①】荒瀬ダム上流の瀬戸石ダム 撤去する会が堆砂・水質汚濁を指摘するも、ダムは残る。

【B-②】球磨川水系 川辺川ダム 蒲島知事の建設中止表明あるも2020年に建設続行表明。

【B-③】長崎県 川棚川水系 石木ダム

・ 1975年 国が建設事業を採択1980年反対期性同盟結成。5年県が4世帯の農地強制収容

・ 2019年 県がすべての土地を強制収用。最高裁に上告するも棄却。2025年度末に完成予定。

【C】群馬県 利根川水系 ハッ場ダム完成

・ 1952年 建設省がダム調査を長野原町に通知。強酸性の吾妻川を中和する品木ダム1963年完成

・ 1992年 町・県・国がダム建設基本協定に調印。

・ 2009年 民主党政権 前原誠司国交大臣が本体工事の中止を表明。2011年工事予算復活。

・ 2020年 自民党政権により3月竣工。現在に至る。活火山である浅間山の噴火や強酸性の水質が懸念されることを「Stop ハッ場ダム・市民ネット」が指摘している。

プロデューサー 矢間氏の言葉を一部紹介します。

河川はそれぞれ個性があるのに、一つの型に入れさせているのがダム。鉄とセメントで国が成り立ってきたのは事実だが、日本にもうダムの適地はない。人造湖の土砂堆積により健全な水循環や自然生態系への破壊が各地で起きている。河川がダムの墓場と化し、上流・下流での災害を招く危険性が考えられる。政策の失敗であり、それを

監視してこなかった国民の怠慢でもある。

120年のダムの歴史で2700の既存ダムがあるが、ダム底に活断層が見つかったダムが47ある。今まで国がダムの知識を持っていなかったことに由来する。映画では今日までに中止・係争中・完成のダムを紹介している。今後は自然再生の「脱ダム新時代」となることを招来したい。



能登半島地震の被災地で今なお避難生活を送られている方々。水の確保も困難な日々を2ヶ月以上も続けている映像が流れています。片や、砂ぼこり立つ中東ガザ地区。多くの子供達が幅広の着衣で水の入った容器を大事そうに抱えている映像も。自由に水を使える今市での暮らしは感謝しなければと思うことが多くなりました。

日光連山の水を大谷川扇状地が受けとめ、水を生み出しているのが今市です。ここ数年、冬になると地下水利用の家から水位低下や水枯れの声が聞かれるようになりました。異常気象や水田面積の減少や宅地開発・工場開発による平地林伐採や植林山での伐採などさまざまな要因が考えられ、今後も水量低下は続いていくと思います。都市生活の人々と比べれば私たちはいつも身近に川を目にしています。大谷川は今、今市地区内で工事が進められていますが、市民の皆さんにはこの川の水量・水勢・水質など、気に留めていただきたいものです。山々が健全な水を生み出し、多くの川がそれを下流へ届けています。水源地であるからこそ水は大事にしたい。山を守りたい。ダムはもう要りません。(塚崎 庸子)

ボランティアフェスタで展示

3月9日(土) 中央公民館にて開かれたボラフェスに参加。当日朝、行川(室瀬行川橋付近)で採集したヘビトンボ、カワゲラ、トビケラなどを展示しました。大人から子どもまで、多くの人たちとの出会いがありました。(塚崎)



ウクライナ戦争考

ロシアの2022年2月24日のウクライナ侵攻から2年の歳月が流れた。西側諸国はこれを「侵略」と断じ、資金・武器供与、ロシアへの経済制裁などを行い、日本政府もこれに応じている。だがロシア側は、この戦争は2014年2月22日のウクライナにおける「ユーロ・マイダン・クーデター」をもって開始されたと主張している。まずは、西側のメディアが触れることのない、この8年間の事実経過を安斎著①、孫崎著②、塩原著③などを参考に改めて検証してみたい。なお本稿は議論が分かれるテーマでもあり、あくまで筆者個人の見方であって、会としての見解ではないことをお断りしておく。

(1) ユーロ・マイダン・クーデター(2014年2月22日)

この日ウクライナでは民主的選挙で選ばれていた親ロシア派の大統領(ヤヌコヴィッチ)が流血のクーデターで失脚して親米派の大統領が政権についた。このウクライナ憲法違反のクーデターの誘導者がオバマ政権の副大統領ジョー・バイデンと国務次官補ヴィクトリア・ヌーランドであったことはよく知られており、彼らは50億ドルの資金を調達してこのクーデターを成功させたと自ら公言している。

これにより、2014年5月にはポロシェンコ大統領の親米政権が誕生し、以下の(2)(3)項目の、ロシアにとっては死活問題ともいうべき重大な脅威をもたらす政策がとられることになる。この時期の状況はオリバー・ストーン監督も参加して作られたドキュメンタリー映画(④)に詳しく描かれている。また侵攻時期のプーチン発言の要旨は孫崎著②30～35頁などにも簡潔にまとめられているので参照されたい。

(2) ウクライナのNATO(北大西洋条約機構)加盟問題

1990年の冷戦終結後、旧ソ連圏の国々の軍事同盟WTO(ワルシャワ条約機構)は解体されたが欧米側のNATOはそのまま存続した。しかも当時のアメリカの国務長官はじめ、独仏など欧州の首脳たちも口を揃えて「NATOは1インチたりとも東に拡大しない」と約束していたにもかかわらず、この約束を反故にして旧ソ連圏を東に進み、ついにはロシアと国境を接するウクライナにまでNATO加盟をそそのかす。バイデン副大統領は2019年2月までに、ウクライナ憲法を修正させ、NATO加盟を同国首相の努力義務にしてしまった。この結果ロシアは冷戦時代のアメリカが経験した「キューバ危機」に匹敵するような国家存亡の危機に陥った。当時ソ連はアメリカの隣国キューバにミサイルの発射基地を建設しようとしたが、あわや全面核戦争の一手手前までいく。この時のキューバとワシントンとの距離は約2000km。今回のウクライナとモスクワの距離は約500km。ロシアにしてみればキューバ危機より桁違いに深刻な存亡の危機に陥ることになる。

(3) ドンバス地方のロシア語を話す住民たちへの民族浄化的軍事弾圧

ポロシェンコ新政権は、アゾフ連隊など「ネオナチ」と言われる極右民族主義者たちの民兵組織を国軍に編入したうえで、「ドンバス地方の2州のロシア語話者」たちに対して弾圧を開始し、航空機、戦車、大砲などを繰り返し使用して激しい戦闘・蛮行が繰り返された。これに対して2つの州は直ちに独立を宣言、武装組織を結成して対抗する。つまりウクライナは2014年以来、「ウクライナ語を話すウクライナ人」が「ロシア語を話すウクライナ人」を敵視し、ネオナチ系の

ジャーナリストがテレビで「彼らは絶滅されなければならない」などの発言を繰り返して緩慢なジェノサイド的軍事弾圧を実行するという、恐るべき内戦状態に陥っていたのだ。(この内戦の状況はドキュメンタリー映画⑤に記録されており、ネットで簡単に見ることができる。)

(4) ミンスク合意・ミンスク合意2

この内戦は2014年9月、隣国ベラルーシの首都ミンスクでのウクライナ、ロシア連邦および「ドネツク人民共和国」、「ルハンスク人民共和国」(ドンバスの2つの州)の四者の間での合意文書により停戦に至った(「ミンスク合意」)が内戦は続く。

次いで2015年2月フランスとドイツの仲介の下、ウクライナとロシアの間で「ミンスク合意2」が成立。内容はウクライナと分離独立派双方の武器使用の即時停止。両人民共和国に「特別な地位」(＝外交権)を与える。この地位はウクライナ政府がNATO加盟を希望したとしても両共和国が拒否すればNATO加盟は不可能になるというもの。しかし結局この合意も機能しなくなる。2019年ゼレンスキーが大統領となり、2021年1月「ミンスク合意2」破棄。2022年2月10日にはロシアも同合意を破棄。かくしてウクライナの内戦は再び戦闘状態。

(5) ロシアのウクライナ侵攻(2022年2月24日)

ウクライナ軍は公然とドンバス地方の二つの「人民共和国」に攻撃を続行し、2月20日前後の停戦違反は2～3,000件。爆発約2,000件。事ここに至ってロシアはこれら2つの共和国の独立を承認し、「友好協力相互支援協定」を結び、両国の要請に応える形で2月24日に「特別軍事作戦」に踏み切る。

その後、とんでもないことが発覚する。ロシア侵攻後の事ではあるが、2022年12月7日、同合意の調停者の一人、ドイツのメルケル前首相が同国の一流新聞のインタビューで、ミンスク合意はウクライナが軍備増強するための時間稼ぎであったと告白してしまった。「なんのことはない、ロシア以外のミンスク合意に関する西側当事国は、揃いも揃って…ウクライナの軍事増強のための方便として利用していたに過ぎなかった」(安斎著①21頁)。同年12月9日、欺かれたプーチン大統領は「西側諸国に対する信頼は0(ゼロ)に近い」と表明した。

ロシアの侵攻は、こうした経緯をたどって実施されており、これを、たんなる「侵略」と見なすことは誤りである。繰り返しになるが、ウクライナのNATO加盟は明らかにロシアにとっては存亡の危機となること。また両人民共和国への軍事的支援は国際法的にも認められている「人道的介入」または「人道的干渉」であること。この二点をよくよく考えてみるべきではなかろうか。(文責・森)

参考図書 ① 安斎育郎著冊子「安斎育郎のウクライナ戦争論」定価 250円。同氏の専門は放射線防護学・平和学で世界的に活動。戦争の実態を偏見なく伝えている良書。ご希望の方は事務局・森までご連絡ください。② 孫崎享著「平和を創る道の探求」(かもがわ出版2022年刊) ③ 塩原俊彦著「ウクライナ戦争をどう見るか」(花伝社2023年刊) ④ ドキュメンタリー映画「ウクライナ・オン・ファイアー」(日本語版)題名(「」の中)で検索し、そのウィキペディア欄の「出典6」が日本語版 ⑤ フランス人女性映画監督作「ドンバス2016」(日本語字幕版・約50分)

活動報告

2023年

10月 7日(土) 来季 川むし探検の下見 (神子内川)
10月28日(土) ゆったりウォーク(雷雨により途中中止)
11月23日(金) 定例会

2024年

1月26日(金) 定例会、 2月23日(金) 定例会

だいや川通信
第56号



郵便振替口座 00140-4-535550

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時~17時:森)

0288-26-3324 (17時~21時:塚崎)

<http://www.somesing.net/daiyagawa/>

川むしたんけん隊 @ 神子内川 (準備調査会・10月7日 土曜日)

秋の「川むしたんけん」は、これまで行ったことのない「足尾の川で」と考え、9月中旬を予定していましたが、天候不順や日程の関係で準備不足となり、今回は大人だけの調査会としました。

河川: 日光市 神子内川 (みこうちがわ)

日時: 2023年10月7日(土) 午前10時30分

天気: 晴れ 気温: 14.5℃ 水温: 12.5℃

川幅: 20m 水面幅: 10m

川底の状態: 砂礫、50~100cmの岩

指標生物

水質階級 I きれいな水

ウズムシ(プラナリア)、ヒラタカゲロウ類、
カワゲラ類、ヘビトンボ、ナガレトビケラ類、
タニガワカゲロウ類

※ この地点での水質は『きれいな水』と判定できます。
水質階級Ⅱ(ややきれいな水)~Ⅳ(とても汚い水)の
生き物はゼロでした。

細かく名前を上げると、

ウエノヒラタカゲロウ、サツキヒメヒラタカゲロウ、
シロタニガワカゲロウ、モンカゲロウ、カワゲラ

指標生物以外では、

ガガンボ幼虫、イトミミズ、サナエトンボ幼虫、
ノシメトンボ成虫、ボルボックス

初めての場所でしたが、予想通りの生き物でした。小型が目立ちましたが彼等は冬に成長します。大雨のない静かな川でこれからゆっくり体を作っていくでしょう。

しばらくぶりに見つけたものがいました。ボルボックスと言います。直径3mmほどの寒天状の球形で、中に植物プランクトンが育っています。一個だけでしたが久しぶりに見て嬉しかったです。春の「川むし」は5月下旬「なんとなくのにわ」との開催を予定しています。また、たくさんの川むしたちに出会えますように。(塚崎)



↑ 1時間ほど、数人で川むしを採集しました

← 今回採取したプラナリア。

1cmくらい。高い再生能力を持つ不思議な生き物です。

2022年度 今市の水を守る市民の会 会計報告

収入の部		円
会費		20,000
ゆったりウォーク参加費		4,600
募金箱(イエローレシート、その他)		43,780
合 計		68,380

支出の部		
通信送料 / ハガキ代		18,330
ネット使用料		12,988
会費振込手数料・通知郵送料		3,594
ゆったりウォーク保険/手数料込		2,440
プリンタ代金		43,780
コピー代		300
合 計		81,432

2022年度差引残高	-13,052
前年度繰越金	110,465
次年度繰越金	97,413

編集後記

半世紀前、新潟に住んでいた。近くの刈羽村(柏崎)に原発を作る東電の計画があった。危険視している知り合いも多かった。関心を持ち建設中止を求める裁判を傍聴した。法廷で直接聞いた話ではないが「地滑りで発電所ごと海に転落する可能性もある。その場合どうなるのか」という質問に、担当者は「そのようなことが起きても原発は安全です」と平然と答えたという。話を聞いて、安定な地盤に作ったはずの原発が海に落っこちるという発想がどこから出てくるのか不思議に思った■地学関係の知り合いから頼まれた、地盤のボーリングで掘り出した「コア」を写真撮影するバイトでその理由がわかった。硬い岩盤に挟まれた「グリーンタフ」と呼ばれる柔らかい緑色をした地層調査が目的のひとつ。日本海側に分布し、地滑りの原因になっていると聞いた。あ、原発が海に滑り込むかもしれないという心配の理由がこれかと思った■江戸後期の医家で紀行家、橘南谿の見聞録「東西遊記(東洋文庫[238])」の中に「名立崩れ(なだちくずれ)」という章がある。南谿が訪問する37年前(1751年)、糸魚川と直江津間の漁村で起こった大災害。「うしろの山二つにわかれて海中に崩れ入り、一駅の人馬犬ことごとく海底に没入す」。村全体が地すべりにより海に沈み壊滅した記録だ■この国では大きな岩山でさえ地震で海にすべり落ちてしまうことがある。原発全体が海に落ちたらとてつもない放射能汚染・大災害を招くこともいまの私たちは知っている。それでも「経済」を支えるため、今後も原発の運転は続くのだろうか。(T)